子育て情報（園長先生の子育てひろば）

令和２年度　１０月
椙山女学園大学附属幼稚園

子どものうた

園長　山中　文

♪誰かさんが　誰かさんが　誰かさんが　みつけた
ちいさい秋　ちいさい秋　ちいさい秋　みつけた♪

「小さい秋みつけた」（サトウハチロー作詞、中田喜直作曲）は、よく知られた秋の歌です。子どもの頃、さみしい歌だなあと思いつつ、誰かさんって？昔の風見の鶏って？と頭をひねったり、歌っていろんな気持ちになるなあと不思議がったりしたことでした。

後になって、作詞のサトウハチローは、この歌の歌詞の背景について、子どもの頃家で見つけた自分だけの秋なのだと言っていた、と聞きました[1]。サトウハチローは子どもの頃熱湯で大やけどを負い、長いこと病床にあったそうです。そのころのことだとすれば、澄ました耳に聞こえる「目隠しおにさん、手のなる方へ」の音や「呼んでる口笛もずの声」、ふっと感じたであろう「わずかなすきから秋の風」、記憶として思い出されたのであろう「昔の昔の風見の鶏のぼやけたとさかにハゼの葉ひとつ」などいう歌詞などは、閉じこもった部屋で見つけた大切な秋の気配なのかもしれません。

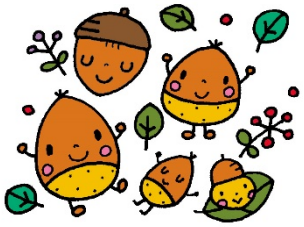
さみしい感じがするのは、歌詞の不思議さもありますが、メロディーが短調だからということもあります[2]。子どもの歌には、短調の歌はあまりありません。幼児期に歌い継がれている歌で短調の歌といえば、これ以外に思う浮かぶのは「うれしいひなまつり」（サトウハチロー作詞、河村光陽作曲）か「赤い靴」（野口雨情作詞、本居長世作曲）くらいです。「子どもは明るく元気に」という大人の思い込みや願いでしょうか。あまり、取り入れられなかったのです。

でも、子どもも、さみしい時や悲しい時があります。そんな時に元気溌剌といった曲がなぐさめになるかというと、そうではなく、もの悲しく聴こえる歌が気持ちに寄り添うこともあるものです。

現代の子どもの歌には、そういった観点からか、短調が見直されるようになっています。たとえば、「ドロップスのうた」（まどみちお作詞、大中恩作曲）では、昔、泣き虫神様が泣いて、真っ赤な涙や黄色い涙を流したりしてドロップスになる、というお話が歌われますが、その中で♪まっかななみだがぽろんぽろん　きいろいなみだがぽろんぽろん♪と歌う部分だけ、短調になっています。また、ちょっと前に「ドコドコノキノコ」（もりちよこ作詞、ザッハトルテ作曲）は、短調っぽいロシア民謡になっています。だんだん速くなることとあわせて、ちょっといつもの歌とは違う感じがしたのでしょう、あちこちで歌われましたね。

歌に持つイメージはどこから来てる？と思うと、ちょっと音楽の発見にもなるようです。子どもたちがいつも歌っている歌を立ち止まって考えてみてもいいかもしれませんね。

昨夕、小学生くらいの少年たちが「ああ、秋の夜の匂いがする！」と言いながら、私の脇を通り過ぎました。どどどどっと複数で走り抜ける様は風情も何もないですが、言葉にはとても風情があって、ちょっとおもしろいできごとでした。コロナ禍の中でも、子どもたちはたくましいものです。



[1] 以下を参考にしました。
https://www.minyu-net.com/shasetsu/nikki/FM20200904-533137.php

[2] 短調だから必ずしも「さみしい歌」というわけではありません。